康熙帝の親征

噶爾丹斃れ策妄那布坦起る

に歸せざるは無し。

時に清の康熙帝既に四方を平定して、武威赫々精鋭當るべからず。帝惟らく是より更に蒙古を撫し、準噶爾を服せしめざるべからずと。即ち諭して侵領の地を還へさしむ。準噶爾汗聽かずして益〻進略を逞うせり。是に於て康熙二十九年（一千六百九十年）清の大軍左右に分れ、古北口及、喜峯口、の兩路より進み、兩軍烏蘭布通（ウランブトン）に出會し、激戰數刻の後噶爾丹遂に敗れ、營を拔て夜遁る。清の輕騎之を追究したりしも、彼を逸せり。

後四年噶爾丹兵を率ゐて入寇す。其の翌年康熙帝再征し、噶爾丹、之と鏖鬪復た敗らる。斯の如く噶爾丹久しく出でゝ歸らざる間に、伊犂の舊部落は、盡く其の兄の子策妄那布坦（ツェワンラブタン）の併有する所と爲り。回部、青海、哈薩克等の諸部も亦噶爾丹の精鋭全く清兵の爲に喪はされしを見て、前後皆叛き去りければ、噶爾丹今は歸るに家なく、據るに地なく、憂悶の極、藥を仰いで自ら死す。是に於て策妄那布坦（ツェワンラブタン）は準噶爾一部を收め、又噶爾丹に倣ひて、吐爾扈特、和碩特の二大部を併せ、再び西域の一大國を爲せり。